講演後半文字おこし

発言者	内容
文教大学 二宮教授	では、課題はないのか考えていく。 部活の指導員を導入すると、学校の先生よりも専門性が高い。だから、子どもたちの食いつきもよい。 成績を残すと、少し天狗になる指導者がいないわけではない。 中には学校長よりも立場が上だと勘違いする指導者もいる。 そうなることにより、本来ならば保護者から依頼を受け、指導を始めたのにも関わらず、結局は保護者から指導者を変えてほしいと相談がされることがある。 また、指導力が上がってくると、アンガーマネジメントができず、生徒を罵倒したりする。 その他にも容易に想像できるのが、性的なハラスメントなどであり、これらについても考えていかなければならない。 さらに、平日の部活動顧問とのミスコミュニケーションが起こることもある。 平日のレギュラーメンバーと休日のレギュラーメンバーが異なったり、どちらの指導者の言うことを聞けばよいのか、混乱を招くようなことも問題として起こっている。 守秘義務などの教育的な部分について、専門外であるが故に指導を投げ出すのは簡単。 このような責任の放棄により、盛んだった部活が盛んではなくなってしまうようなことも考えられる。 これは地域連携や地域移行で想定される課題というよりも、今までの部活動指導員における問題点であるため、こういったこともしっかりと担保しながら考えを調整していくことが大切である。 安易に専門性が高い人が来るから大丈夫だと構えることは適切ではない。 被害を被ってからでは、その被害者を救うことはできないため、この部分についてはもっと考えていく必要がある。
	次の点について、今回の地域移行・地域連携の中でも非常に重要な視点ではあるがあまり知られていないため紹介したい。 日本スポーツ協会のスポーツ少年団パンフレットに「少年団には何歳から何歳までの人が入れますか。」という質問がある。 その回答では、原則として小学生以上と記載されている。 中学生や高校生の加入も可能であり、中学生以上の団員は現在全国で約 10 万人いる。 中にはスポーツを楽しみながらリーダーとして活動して、将来の指導者を目指す人もいる。 中学生や高校生になってもやめることなくそのまま入団し続けることができる、別の居場所としてスポーツ少年団は存在している。

	つまり、地域移行や地域連携をしなくても、初めから私たちはスポーツ少年団でスポーツをすることが可能であった。 このように、今ある子どもたちの組織をそのまま発展させていくことによって、5年後、10年後にうまく地域移行の形が実現するパターンも考えられる。 つまり、長期的な視点で地域連携を模索するやり方も一部あると考える。 例えば、小学校の頃に少年団でスポーツをしていたイメージを中学生になっても継続することや、頂点を目指すスポーツだけではなく、将来スポーツの指導者として活動をする。 そのような人々のモデルケースからさらに展開していくことも考えられる。
	私はこれが１番問題であり、もったいないと思っている。 子どもたちを巻き込みながら話し合いの場を作っていく形にならないと、結局最後は笑顔が生まれづらいのではないかと考える。 競技力を一生懸命上げていきたいという生徒もいるだろう。 習い事があるため、活動を少し減らしたいと思っている生徒もいるだろう。 あるいは、やりたい種目がなかったから仕方なく既存の種目をやっているが、本当はやりたいものがあると思っている生徒もいる。 そういった色々なことを話し合っていく場を作っていきたいと考える。 そのような場はやはり生徒会ではないか。 現在、例えば部活動の地域移行に関して生徒会が話し合いを持っている中学校はどれくらいあるのか、引っ張る先生方がどれぐらいいるのか考えた時に、寂しい状況にある。 このような議論の場の構築が重要である。 そして、部活動のダウンサイジングがあってもいい。 これを選択肢として用意できるかどうかが重要である。 全部が全部同じにする必要はなく、規模の小さい部活動も作っていくことができる。 そうすることにより、塾や他の種目や他の文化的なものを習っている子どもたちも共有ができる。 子どもたちは現在、オンラインに関する知識、操作や技術の高い人たち多い。 ＡＩやＩＣＴを駆使することにより、積極的な部活動を運営していくことが可能である。 高校野球でも、チャットＧＰＴに練習メニューを考えてもらい強くなったという例が出てきた。 そういったオンラインを駆使しながらやっていくような部活動の形態も大切だと考える。 その種目の経験がない指導者も、ＩＣＴの活用によって負担軽減につながると考える。

	現在ある部活動をそのままの形で地域移行、あるいはそのままの形で継続することが決してゴールではなく、持続可能な形に変えていく視点が重要である。 大人の理屈ではなく子どもの理屈に立った改革であることがポイントである。 そして子どもたちの話し合いにより解決の糸口を見つけられると、課題解決能力も養うことができる。 一緒に解決していくことによってさまざまなアイデアが生まれることも期待できる。
	最後に、これからの改革に必要な視点をもう一度まとめていく。 これまで子どもたちがスポーツや文化芸術活動に触れる機会を公的に保障してきた部活動は、日本が蓄積した極めて重要な機能であり、再認識していただきたい。 部活動は私たちの人生を豊かにしてきたということをまず大切にしていきたい。 そして、学校部活動がなくなっていく、立ち行かなくなっているところも出てきている中で、その良さを活かしながらこれからの社会でも持続可能性の高い改革をしていく必要がある。 まだなんとかなるうちに、20 年、30 年後を見据えた改革を今まさに始めなければならない。 今の中学生対象の改革ではなく、もっと長い目でみて改革を行っていかなければならない。 先生はこれまで犠牲になってきたが、新しい犠牲者を出してはいけない。 先生をはじめ一部の限られた人だけが犠牲になる形で部活動を行ってはいけないということが重要となってくる。 みんながうまく分かち合えるような策をみんなで考えなければならない。 そのためには、落としどころとして、例えば量的にはどれぐらいがベストなのか、 経済的負担としてはどのくらいがベストなのかなどを具体的に出していかないとディスカッションをすることはできない。 そして、子どもたちの考えを生かした改革にしなければならない。 地域で他校の生徒と一緒に活動したいというニーズが一部あり、面白いと感じた。 学校での子どもたちだけではなく、隣の中学校、近隣の中学校と一緒にやりたいと思っている子どもたちもいる。 だから、そのような部活が 1 つあってもよい。 このように、色々なニーズにかなった形を作ることもポイントである。 個人的に思うのは、日本が世界的にも 1 番遅れている、まさにインクルーシブ教育についてである。

	障害のある方など地域にいる様々な人とスポーツや文化活動を通して、絡んでいくことができる可能性があるため、社会教育として入れていくことも可能である。 あるいは、外国人の共生の問題等にもそういった文化的な交流が非常に重要になってくる。 また、学校教育から生涯学習領域の転換とあるが、できればこの生涯学習領域をさらに超えていきたいというのが私の考えである。 もう少し広い視野で、教育委員会の殻から抜け出し、首長直結の部分にどうお金を出させるかが重要である。 地域課題解決を先頭に挙げながら、部活動の改革が最終的には地域のどの部分を改善する力があるのかを訴えてお金を持ってくる、発想の転換が必要だと考えている。 そして、まさに私の分野であるスポーツボランティアの活動についてである。 今までは、地域連携や地域移行を通して、学校の中で行われている部活動がどう変わっているのかという話をしてきた。 しかし、大会の運営や中体連の問題も非常に出てきている。 学校の先生の中心である中体連の大会に様々な処置を施してもよいし、学校の先生が運営していない新しいイベントの構築へのアプローチなど、様々な形を模索していくことが大事である。 もしかしたら 中学生の大会を運営する時が来るのではないかとワクワクしているスポーツボランティアの方々も既にいる。 皆さんはなかなか出会わない人かもしれないが、非常に多い。 そのため、スポーツボランティアがとくに盛んな地域である埼玉県が、そういった人材や気持ちを活かした大会運営もあるのではないかと考える。 最後に、中長期的な視点で部活動の地域連携を構築していくことが重要だと考える。 今すぐ結論を出す必要もない。 このまま部活動を継続したときにどのようになるのかをシュミレーションし、目標とともに実施すると、とても良いと考える。 この部活動の地域移行、地域連携という形に、私自身も何か明確な答えはないが、日本のスポーツや文化、そして部活動の形態の歴史や全国の事例を自分なりに解釈し、紹介した。 また、部活動の地域移行に関わる委員会に参加させていただいているため、その中でも意見をしながら、埼玉県全体の部活動がさらに盛んになるような形を模索し、子どもたちの笑顔がどうすれば増えるのかを考慮しながら活動していきたい。 ご清聴、ありがとうございました。